

The Image of Japan in Modern Egypt — Mustapha Kamel as a Model —

Dr. Hassan Kamal Harb
Cairo University Faculty of Arts

There was no direct contact between the Egyptians and the Japanese until the beginning of the nineteenth century. China was the mediator between Arab and Japanese trade and knowledge. In this study, the researcher examines the image of modern Japan in the minds of the Egyptians, analyzing the writings on Japan from ancient times to the modern age, which can be described in a couple of key ways. In ancient times, Japan was perceived in Arab minds as a country hidden behind a superpower, China, inhabited by a people who have not been portrayed as human beings, but supernatural creatures, ghosts and demons. These images have completely changed since the middle of the nineteenth century, after the emergence of the writings of Egyptian and Arab thinkers, such as the ones of Mustapha Kamel (1874-1908) on Japanese modernization.

The researcher examines Mustapha Kamel's vision of Japanese modernization, pursuing the course of political and social changes in Japan since the mid-nineteenth century. It describes the trade treaties concluded between the West and Japan at the beginning of the sixteenth decade of the nineteenth century, as the beginning of Japan's opening to the outside world after more than two and a half hundred years of isolation. On the other hand, these inequitable treaties have brought about some political and socio-economic changes, which has led to the unification of political and popular forces on two main objectives: the overthrow of the Tokugawa government and the restoration of power to the Japanese emperor. He then discusses the difficulties and challenges that the Japanese faced after the fall of this government and the restoration of the Emperor Meiji in 1868. One of these challenges was the intellectual and cultural conflict between Japanese thinkers concerning the extent and scope of introducing and accepting elements of Western civilization and the preservation of Japanese culture and traditions. In this respect, Kamel refutes the accusation that the Japanese are merely imitators and non-creative people. He points out that an important feature of the Japanese personality is their unique ability to exploit without restraint sciences and cultures from other countries and their creativity in Japanizing these cultures. Kamel tries to prove his opinion by giving examples, such as the Japanese uptake of Chinese civilization in ancient times, and then Japanese ingenuity in the efficient extraction of western knowledge and science in the nineteenth century. Kamel believes that this is not imitation, but rather a Japanese talent, ingenuity, and creative learning that reflects their voracity and curiosity for new things and their passion for learning and progress.

In this article, the researcher pursues the real awareness of Egyptian thinkers, highlighting Mustapha Kamel's vision of the process of enlightenment and modernization in Japan. It can be said that while Egyptian thinkers were primarily interested in the politics and economy of modern Japan, the ordinary Egyptian people were more concerned about Japanese victories over great countries like China and Russia. However, despite these various interests, there was no in-depth analysis of the problems of Japanese modernization and enlightenment.

, particularly with respect to the confrontations and violent conflicts that have been going on for a long time between these custodians of Japanese identity, and the defenders of westernization in Japan.

Keywords:

Modernization, Image of Japan, Identity, Westernization, Mustapha Kamel

صورة اليابان في مصر الحديثة — مصطفى كامل نموذجاً —

د. حسن كمال حرب - كلية الآداب جامعة القاهرة

يتناول الباحث في هذه الدراسة صورة اليابان في عقول المفكرين المصريين متتبعا نشأتها وتطورها ذلك من خلال تحليل الكتابات المبكرة للمفكرين العرب حتى بداية القرن التاسع عشر، ثم البحث في اهتمامات المفكرين المصريين المعاصرين مثل مصطفى كامل (١٨٧٤ - ١٩٠٨) بالجوانب السياسية والتعليمية والاجتماعية للنهضة اليابانية خلال القرن التاسع عشر.

بعد استعراض الباحث صورة اليابان في الكتابات العربية قديما وحتى العصر الحديث، اكتشف أن صورة اليابان في العصور القديمة كانت تتميز بصفتين أساسيتين وهما: نظرة العرب لليابان كدولة صغيرة تختبئ خلف قوة جبارة وعظيمة وهي الصين. أما السمة الثانية فهي تصوير ورسم الكتابات العربية لليابانيين على أنهم ليسوا بشراً ولكنهم مخلوقات غريبة مثل الشياطين والجن ومخلوقات خارقة للطبيعة. أما الصورة المعاصرة لليابان حالياً فقد بدأت تتشكل ملامحها في النصف الثاني من القرن التاسع عشر حيث بدأت تظهر اليابان في الكتابات العربية الحديثة وخاصة مصطفى كامل والذي استفاض في الكتابة حول النهضة اليابانية الحديثة.

يستعرض الباحث رؤية مصطفى كامل عن التحديث في اليابان وخاصة مسار التغيرات السياسية والاجتماعية في اليابان منذ منتصف القرن التاسع عشر. يصف كامل المعاهدات التجارية بين الدول الغربية و اليابان التي أبرمت في بداية العقد السادس من القرن التاسع عشر، بأنها كانت بداية انفتاح اليابان على العالم الخارجي بعد عزلة استمرت لأكثر من قرنين ونصف. على الجانب الآخر، نتج عن هذه المعاهدات غير المتكافئة قلائل سياسية وتغيرات اقتصادية واجتماعية أدت إلى توحيد القوى السياسية والشعبية على هدفين أساسيين وهما إسقاط الحكومة واستعادة السلطة للإمبراطور الياباني. يناقش كامل الصعوبات والتحديات التي واجهها اليابانيون بعد سقوط هذه الحكومة و استعراش الامبراطور مييجي عام ١٨٦٨. أحد هذه التحديات كان الصراع الفكري والثقافي الذي استعرت ناره بين اليابانيين بشأن مدى ومجالات إدخال وتقبل عناصر الحضارة الغربية وبين الحفاظ على ثقافة اليابان وتقاليدها. في هذا الشأن يفند كامل التهمة التي ألصقت باليابانيين في أنهم مقلدين غير مبدعين، حيث يشير إلى أن انتحال اليابانيون دون حرج علوم وثقافات الدول الاخرى وابداعهم في صهر هذه الثقافات في قالب ياباني فريد يعد من أهم خصائص الشخصية اليابانية. يدلل كامل على ذلك بما أخذته اليابان من الحضارة الصينية في العصور القديمة، ثم براعتهم في النهل من المعرفة والعلم بكفاءة من الغرب في العصر الحديث. يعتقد كامل أن هذا ليس تقليد بل موهبة وبراعة وإبداع في التعلم ينم عن حب استطلاع ونهم وفضول لشعب يعشق الجديد، شغوف بالتعلم والترقي.

يناقش الباحث، في هذه الورقة البحثية، مدى الوعي و الإدراك الحقيقي عند المفكرين المصريين، مسلطاً الضوء على رؤية مصطفى كامل. يمكن القول رغم اهتمام المفكرين المصريين بالتحديث الياباني في السياسة والاقتصاد واهتمام الشعب المصري بالانتصارات اليابانية على الدول الكبرى مثل الصين ثم روسيا، نلاحظ غياب التحليل العميق لمشاكل التحديث الياباني خاصة فيما يتعلق بالمواجهات والصراعات العنيفة التي استمرت لفترة طويلة بين دعاة التغريب و بين المحافظين على الهوية اليابانية

الكلمات الافتتاحية :

التحديث ، صورة اليابان، الهوية، التغريب، مصطفى كامل

近代エジプトにおける日本像—ムスタファ・カーメルに焦点を当てる—

ハサン・カマル・ハルブ

カイロ大学文学部

はじめに

エジプトを含むアラブ世界では、近代時代に至るまで、日本との間に正式かつ直接的な交流はなかったが、中国との交流・交易は盛んだったので、日本のイメージは中国を通じて中東に渡った。16世紀になると西洋人による旅行記から日本が紹介され始め、アラブ世界に日本という概念が形成されることとなる。16世紀から18世紀にかけてはポルトガル人とオランダ人によって、また19世紀においてはイギリス人とアメリカ人による日本に関する著作が多く見られるようになった。本稿では、9世紀以降エジプトを含むアラブ諸国で執筆された日本に関する記述を追求することで、アラブ人における日本のイメージを明らかにしたい。また、エジプトにおいて近代日本について書かれた書物を取り上げ、近代エジプト人が日本に対しどのような関心を持っていたかについて紹介する。その中で、20世紀初期に最も幅広く読まれ、近代日本を詳細に紹介したムスタファ・カーメル(Mustapha Kamel, 1874-1908)を対象とし、カーメル著al-Shams al-Mushreqa (以下『東方の太陽』と称する)に焦点を当てる¹。カーメルが近代日本の何に関心を持ち、何をエジプトで紹介したのかを探ることにより、近代化の捉え方の一面が分かると考えられる。

第一章 : アラブ文献における日本像

本章を2点に分ける。まず、アラブとイスラーム世界における日本のイメージに関する主要な研究を整理する。2点目に、アラブの古典書における日本に関する記述を調査し紹介する。具体的には9世紀以降のアラブ地域における日本に関する記述を追求し、エジプト人を含むアラブ人における日本像を明瞭にしたい。

1-1. 先行研究における日本とアラブの出会い

本節では、アラブとイスラーム世界における日本像を対象とした研究を紹介する。オイルショック以前では、アラブに関するものよりイスラームを対象とする研究が多く見られた。例えば、内藤智秀(1968)は日露戦争で勝利した日本とパン・イスラーム主義の関連性について追求している²。

内藤は、近代時代のイスラーム教徒にとっての日本は中立的な立場としてみなされていたものの、日露戦争の勃発によりキリスト教正教派のロシアの敵、ひいてはイスラーム教徒の味方と捉えられるようになったと主張している。一方日本人は、イスラーム教徒に対して日本に宗教を伝来し布教するイメージがあったと指摘している³。また、内藤はイスラーム世界におけるパン・イスラーム主義の発生について紹介しつつ、日露戦争の前後とパン・イスラーム主義の関連性を実証するため、さまざまな証言を提示している。例えば、「アリー・ヴァビー・ベイの編集した『故トルコ帝の思想と思い出』の中、トルコ帝アブドル・ハミッド二世の言行として、日露戦争

とパン・イスラミズム」についての記述に関し次のように紹介している。「我々は、日本人の成功を衷心から喜ばなければならない。ロシア人に対する日本人の勝利は、即ち我々の勝利である。ロシアの余力が極東に傾注されるのは、我々のために幸福である。」⁴。また、「ロシアには数百万のイスラム教徒があり、ロシアはわが帝国内におけるキリスト教正教教会、並びにイエルサレムの聖地に対する保護権を実施しようと渴望している。我々がロシアとの妥協案を見いだすようにならなかったことは、まことに遺憾の極みである」と引用している⁵。次にトルコ人記者の、「日本がもし、イスラム国となれば、日本の天皇陛下がカリフなることが、最も適当である。これを以てイスラム圏諸国の団結は、いよいよ強大なるものとなるに至るであろう」との発言を引用している⁶。

ハムザ・イサム(1982)は、明治時代における日本のエジプト研究について紹介している⁷。ハムザによれば、日本人における中東の認識は明治時代からではなく江戸時代に見つけることができると述べ、中国の文献がその認識と知識の媒介の源であったとしている。江戸時代後半になると西洋の文献の導入により日本人の中東知識が拡大したとし、新井白石(1657-1725)の著書を取り上げている⁸。また、ハムザは、日本人の近代エジプトへの関心は、「台湾・朝鮮の統治技術に役立てようとするための西欧列強の対アラブ・エジプト政策、植民地経営に対する関心」であると述べている⁹。

宮治一雄(1988)は、日本における中東とイスラーム世界に関する知識と認識研究について論じている¹⁰。日本は古来より中国大陸からの情報に依拠してきたが、江戸時代の半ばからはヨーロッパ諸国からの情報を元にするようになり最近までこの状態が続いていたと指摘している。また、日露戦争により日本が台湾と朝鮮に進出し帝国主義の道を歩み始めるようになると、認識のあり方についてもヨーロッパ列強のそれを模倣するようになっていった。そこで、日本は台湾・朝鮮統治の方策を学ぶためにイギリスのエジプトとフランスのアルジェリア政策に関する研究が行われることとなったのは象徴的であったと説明している¹¹。宮治によれば、近代中東諸国に対する日本の関心は以下の四点に分けることができるとしている。所謂民族運動への関心、社会主義への関心、経済状態への関心と社会と文化への関心である¹²。

渡辺宏(1962)は、明治以前の日本では18世紀初頭の新井白石以後、限られた人達の間だけで、イスラーム教とイスラーム社会の存在が知られていたことは疑いないと論じている¹³。言い換えれば、宗教としてのイスラームを初めて知ったのは新井白石であると述べている。白石は、薩南諸島に潜入したイタリア生まれのキリスト教宣教師シドッチ Juan Bapista Siddottiを1709年に小石川の切支丹屋敷で取り調べ、シドッチの経歴、海外の事情、キリスト教の内容を問い、その要旨を漢文体で『采覧異言』に記し、その後書き下し文として『西洋紀聞』に著わした。白石は、これらの海外の諸事情から得たイスラーム関連の知識を記事にしている¹⁴。また、渡辺の考えでは、明治5年に再開されたキリスト教の伝導においてイスラーム教を対比として用いたことや、浪漫的なアラビアン・ナイトが広く流布したことにより、近代日本におけるアラブとイスラームに関する日本人の認識はある意味で広がっていったと論じている。

1-2 : アラブの文献における日本像

本章では、近代時代に至るまでのアラブの文献における日本のイメージを追求する。アラブの文献において、初めて日本に関する記述が掲載されたのは9~10世紀頃にイブン・フルダズベ(Ibn Khordadbeh 820-912)が執筆したal-Mamalik wa al-Masaliqである15。そこでは、中国の東方に「ワークワーク」という国があると紹介されており、日本への認識が生まれた。「支那の東にワークワークといえる国土あり、この国土はすこぶる多量に金を産し、かくてその住民はこの金属をもって、犬の鎖および猿の首輪を作れり、かれらは金の服を着す」という記述がある。「ワークワーク」が日本の「倭国」、「シーラー」が朝鮮半島の「新羅」を意味する中国語からアラビア語に訳されたとみられる16。

渡辺は、古代のアラブ人が日本を示した時にワークワークと名付けたことに関して以下の文献を指しつつ解説している。

ワーク・ワークwaq-waqとアラビア人が呼ぶ土地が日本を指すものか否かについては大正のはじめ遠藤佐佐喜がド・フーユ(De Goeje)の「日本に関する亜刺比亞人の知識」(『東洋学報』5・1,117—39,1915)を紹介して私見を述べた(同「ド・フーユ氏の『日本に関する亜刺比亞人の知識に就いて』の私考」『東洋学報』5・2,267—82,1915)そのほか、山下樸溪「倭国とワクワク(waq-waq)とに就きて」(『地歴学会誌広島高師』1918)や昭和に入って小葉田淳「日本と金銀島との関係形態の発展」(『史学科研究年報—台北帝国大学文政学部』1,1934)、伊東隆夫「唐末五代頃に於ける日本国号の南伝につきて—ワークワーク国の問題」(『歴史学研究』12・2,137—60,1942)などの研究があるが、最近竹内健は「ワークワークと人間のなる樹」(『月報—世界の歴史』7,筑摩書房,1961)の関係を考察した。17

また、ワークワークとはべつにオスマン・トルコ時代のアラビア語の地理書にグールGhulrと表記された土地が日本を指すものであるとの説もあると述べている18。

続いて、地図学者アル・イドリースー(al-Idrisi. 1099-1166)が1154年に制作した世界地図には、日本のことを「waq waq」という国名として紹介している。彼はモロッコに生まれ、コルドバで学んだ後、数年に渡りイスラーム世界を巡行した。そして、リスボンからダマスカスまでの地中海の長さを図ろうとした。イドリースーは30代後半にシチリア王であるルッジェーロ2世(Ruggero II,1095-1154)に呼び出され、世界で初めてとなる世界地図の作成を命じられた19。ルッジェーロ2世はその地図を十字軍の戦争に利用し、チュニジアやリビアなどの中東の国々を侵略した。その地図では、ヨーロッパとイスラーム世界が中心とし、日本も地図の北東に描かれている20。

地図上において、日本は左上に描かれ、その直ぐ下には小島、アルオムル島が書かれており、そしてその下に中国が大国として描かれている。その間に濃色で西から東に塗られているのは海である。イドリースーは、世界を10の地域に分けており、日本は第10の地域に存在している。第10の地域は世界の端であり、その

奥には何があるか不明(不知)であるとしている。そこは嵐が多く濁った中国海があり、その海はワークワークの島々と海洋に繋がっていると記述している²¹。

その後、イドリースーの世界地図は数多くのアラブの歴史家と地理学者に影響を与えた。その中で有名なのは歴史家のイブン・ハルドゥーン(Ibn Khaldun, 1332-1406)である。イブン・ハルドゥーンは、イドリースーの地図と地理的知識を重んじ、イドリースーの著作を一次資料として使用した。特に、海や川、国名、人々などに関してはイドリースーの説明をそのまま採用している。イブン・ハルドゥーンが1377年に執筆した*Muqaddimah Ibn Khaldun*において、「ワークワーク」という国が中国の東に存在していると示している²²。

アフマド・ジャライル(在位1382-1410ジャライル朝第4代君主)の時代には、アブドゥ・アルハサン・アルイスファハーン(Abd al-Hasan Al-Isfahani)によってキターブ アルブルハーン(*Kitab al-Bulhan*)が執筆された。同書の内容は、天文や地理、占星術などについてである。そこでも、中国より東にある島のことを「アルワーク・アルワーク」と記述している。また、その島は女王に支配され、子供が多い国であり、不思議な木から女性が実ると描かれている²³。

上述をまとめると、日本のイメージを二点にまとめることが出来る。一点目は、大国の中国の陰に隠れている国というイメージである。二点目は、日本人が人間よりジン(幽精、妖霊、魔人などの一群)といった超自然的な生き物として描かれており、日本という国もファンタジー色の強い記述がされている点である。

第二章:近代エジプトにおける日本像

本章では、近代エジプト人がどのように明治日本を意識していたかを参照する。そこで、19世紀末から20世紀初期に明治日本に関して執筆された著書をいくつか紹介しつつ、当時エジプトで最も幅広く読まれた著作を中心に考察する。

2-1. エジプト人の関心

明治日本はエジプトのみならず非ヨーロッパ諸国に大きな衝撃を起こした。特に日清戦争、その後の日露戦争での勝利は、最も強い影響をもたらしたと言っても過言ではない。

19世紀末のエジプトの新聞紙上において、日本に関する記事は稀であったが、極東の情勢に無頓着であったというわけではない。オスマン帝国に宗教的・精神的に属しているエジプト人はオスマン帝国の敵国であるロシアのニュースには関心を示していた。例えば、1892年11月1日に出版されたエジプトの月刊アルーヒラール誌(*al-Hilal*)にて、ロシアと中国の通商条約の締結に関するニュースと、中国最高の偉人として孔子を紹介する2つの長文記事が掲載された。一方、日露戦争前の日本に関する記述はほとんど見られない。早い時期に日本の勝利を確信していたのは、詩人のハーフィズ・イブラーヒーム(Hafiz Ibrahim, 1871-1932)である。1905年に出版された詩、“*Ghadat al-Yaban*(日本の乙女)”において、日本に関する詩作をしている。ハーフィズはナイルの詩人と通称される。彼は、兵学校を卒業した後にエジプト軍に入ったが、エジプトを植民地にしていたイギリスに対する暴動を扇動したことによって退役させられた。それ以降、愛国詩を執筆し、ナショナリズムの

代表者の一人となった。彼の多くの詩はフランス語や英語、ドイツ語などに翻訳されている。『日本の乙女』は、エジプト人男性と日本人女性との恋愛の詩である。あらすじは以下の通りである。エジプト人青年がイギリスの植民地になったエジプトの悲劇を語りながら、エジプトに滞在していた日本人の恋人を思い出す。彼女は日露戦争が始まると、エジプト人青年と別れて日本に帰国することを決断した。従軍看護師として戦場に行くためである。青年は彼女に戦争へ行くことをやめさせたかった。なぜなら、彼はかつて軍隊に入り戦争に行ったことがあり、戦場の悲惨さ知っていたからだ。それを彼女に伝えながら、何故こんな美しい人が戦争に行きたがっているか理解できないと歌う。それに対して彼女は、「我ら日本人は死を恐れない勇猛な民族だ」と、日本のため命を捧げるべきだと返答した²⁴。

エジプトでは、日露戦争で日本がロシアに勝利した際、歓喜に包まれた。それは、圧迫された東洋人でも無敵の西洋列強に立ち向かうことができることを証明したからである。換言すれば、西洋列強に圧迫されてきたエジプト人は西洋に勝った日本の力に憧れ、日本の勝利を賞賛した。例えば、上記のハーフィズ・イブラヒムやアフマド・ファダリー(Ahmed Fadaly)などである。アフマド・ファダリーは、国粋主義者の陸軍将校で、ロシアと戦っている日本を応援する為、数人のエジプト軍人と共にエジプト軍を除隊し1907年に来日し、東京で暮らしていた。彼は、1909年に当時の日本で広く読まれていた櫻井忠温(1879-1965)の『肉弾』をアラビア語翻訳して出版した。著書名は、*al-Naffs al-Yabanyya*である²⁵。ファダリーは同書の序において、『肉弾』を執筆した大日本帝国陸軍少将櫻井忠温と早稲田大学の設立者である大隈重信と知り合い、友人になったと記述している²⁶。同書の翻訳の特徴は、文字通りの翻訳ではなく、部分的に付け加えられた箇所が多く見られる点である。その中には、日本の陸軍が勇敢に戦うのに対し、ロシア軍は臆病であるとの記述が多くあるが、原作には殆ど見られない文章である。ファダリーは、来日中早稲田大学でイスラームについての講義を数回行っている。彼は、インドの汎イスラーム主義者モウブリ・バラカートゥラー(1856-1927)と、ロシアのタタール族ジャーナリスト、アブデュルレシト・イブラヒム(1853-1944)との3人で、汎イスラーム主義とアジア主義の考えを支持した英語の論文、*Islamic Fraternity*(イスラーム同胞愛)を発行したが、後にイギリスの圧力を受けた日本の当局に差し止められた²⁷。

2-2. ムスタファ・カーメルの『東方の太陽』

本節では、20世紀初期に最も幅広く読まれ、近代日本を詳細に紹介した『東方の太陽』に焦点を当てる。筆者は、ムスタファ・カーメル(Mustapha Kamel)であり、弁護士、ジャーナリスト、そして国民党の創設者である。彼は、陸軍士官の息子として生まれ、エジプトで初・中等教育を受けた後、フランスで法律を学び1894年に学位を取得した。カーメルはイギリスのエジプト占領に強く反対した。エジプトの統治者だったアッバース二世(Abbās 2, 1874-1944)の要請の元、イギリスの植民地に抵抗するための秘密結社設立の基礎を築き、月刊ジャーナル(*al-Liwa*)を創刊した。また、イギリスからの自力での独立が難しいと考え、フランスに援助を求めた。しかし、1904年にイギリスとフランスの間で調印された外交文書、所謂英仏協商の締結

により、カーメルはフランスに代わりオスマン帝国に目を向けた。それと同時に、彼はエジプト人の愛国心と情熱が独立に導くとも確信していた。よって、政治的手段の場を設けるべく1907年に国民党を正式に設立したが、その数か月後に亡くなった²⁸。

前節で触れたように多くのエジプト人が日露戦争後の日本に関心を示したが、カーメルは日本の近代化を具体的に取扱ったことが特徴である。その中で彼は、福澤諭吉など日本の近代化の先駆者を紹介し、日本とエジプトの近代化の相違を比較し考察している。本節からは、『東方の太陽』の内容を紹介し、さらにカーメルの関心がどこにあったかを解説していく。『東方の太陽』の最初のページには明治天皇の真影が掲載されており、執筆の目的が述べられている。その目的において、日露戦争での勝利や明治天皇について触れつつ、エジプト人が日本の近代化を学ぶ必要性を説いている。また、その対象についても明確に記している。「私は長い期間をかけ、数多くの著作を検討した果実として、本書を通してわが国民、知識人のみならず一般の人々にこの黄色人の共同体(日本)の事情を紹介する。」と述べている²⁹。そして、日清戦争で勝利した後、ロシアと戦う日本人は、賢明の帝の指導の下、勤勉で勇気があると称賛する一方、中国人とロシアの帝王の傲慢不遜を示している³⁰。以下において、いくつかの点に分けて明治日本に関するカーメルの関心に焦点を当てていきたい。

2-2-1. 明治維新に関するカーメルの紹介

カーメルは、二世紀以上鎖国していた日本が1853年の黒船来航とそれに伴った開国の要求により列強諸国と不平等条約が結ばれたという流れについて以下のよう

に述べている。日本は二世紀以上に渡り、世界から孤立して鎖国していた。当時、長崎は日本に入国する為の唯一の地点であり、外国人は入国の許可がおり次第、貿易することができた。1853年、米国はペリー提督が率いる4隻の軍艦を派遣し、日本へ開国と貿易協定を結ぶよう圧力をかけた。米国の強力な政府が期待する計画が実行されるまで、わずか数日しかかからなかった。アメリカ艦隊が江戸湾の入り江に到着後、ペリーは日本の将軍に米国の要求を説明するアメリカ大統領からの国書を送った。日本政府は完全な混乱状態に陥った。その後、政府は長崎に艦隊と指導者を派遣するものの失敗に終わり、米国への返事に対し長い期間を設けるよう頼んだ。ペリーは日本に数ヶ月の期間を与え、艦隊と共に日本を出国した。³¹

そして、上記の政治と社会的な変化によって打撃を受けた日本人は幕府に対する怒りと不満が悪化したことについて、「武士は将軍の行動が日本帝国と帝への侮辱であると信じ、神聖な日本の土地への外国人の侵入を冒瀆行為と捉えた。そこで、日本人は帝に目を向けた。」と述べている³²。こうした政治的な反乱を抑える試みとして、「井伊掃部頭 (Ii Kamon-no-Kami) という、非常に狡猾な人物が帝に対

し現状を承認するよう強要したが、1860年無名の武士によって暗殺された。しかも、この殺人を正当化する発表までされている。」と記述している³³。こうした暗殺や生麦事件などを攘夷運動が齎した結果として紹介しつつ、「その後、帝側からは外国人を追い出すように、外国人側からは日本人の敵意や暗殺の危機に対する不満や怒りを受けるなど、将軍は板挟みに悩まされた。」と説明している³⁴。結果的に、同盟藩により徳川幕府体制が崩壊し、帝を中心とした新政府が誕生した。帝と新政府の方針については以下のように述べている。

帝は王朝の首都「京都」を放棄し、首都を「江戸」に移し、東京(東の首都という意味)に改名した。その時から、帝は西洋文明を日本に導入することに乗り出した。また、構造的には、ナポレオン3世の宮廷のエチケットに沿った制度を定着させた。例えば、王子や、侯爵、伯爵、子爵、男爵などの名誉ある階位が設置された.....帝は10世紀に渡り 正当な権力を奪われ衰退していたものの、敵に対して復讐を企てることもなく、権力を濫用し世を騒がすことも無かった。帝は、文明や礼節、福祉、強国などの高邁理想に日本人を導き、彼らの幸福と主権を想像した。こうした王の尊厳と善意があった事で、人々は繁栄と至福を楽しむことができた。³⁵

そして、明治維新の成功における原動力である武士の愛国心と、それによりおきた変化と改革については、以下のように述べている。

この日本の新しい革命運動は.....近代化への急速な動きの原動力になった。純然たる愛国心は、帝が設立した中央政府に対する反応に見られた。支配階級の廃止が国の利益につながり、伝統とは対立するものの世界に通じる平等な制度が確立されると信じた。また、武士は真心を持って自らの権利を天皇に放棄し、耕作地の所有と管理を新政府からの扶持と引き換えた.....この愛国心の下、人々は数世紀も受け継いできた特権や、正当な権利と階層化された地位を、自ら放棄した。この愛国心は、敵対関係にあった諸藩同士をまとめ上げ、領主により荒廃した国を立て直した。人々を暗黒時代と無知から文明時代に導いたのも愛国心によってである。³⁶

カーメルは、日本人は武士のみならず農民と商人、若者と老人、貧乏人と裕福な人が肩を並べ、日本の活気と称讃のために尽力し、公共の利益に対する高い敬意を払っていると伝えている。また、中国からの文明の受容の仕方と国民性、また明治維新からの西洋文明の受容とその影響について以下のように述べている。

西洋文明の採用において、日本人は6-7世紀に中国を模倣した際と同様の手段を取った。その真似(癖)からは逸脱していない。留学生をヨーロッパに派遣し、国内でアメリカとヨーロッパの専門家と知識人を雇った。西洋から法律を借用し、最終的には西洋化されたシステムを導入した。水兵の制服は西洋化され、西洋の最も先進的なものを模倣して導入した。社会における女性の伝統的な地位は維持されたが、自由が与えられた。日本人は西洋化が従来の伝統に適合するかしないか

を分別した。政府以外の人々の大半は、西洋の衣装よりも伝統的な衣装を好んでいた。それは良いことだと思う。37

上記でカーメルは、日本における西洋文明の受容とその伝統との葛藤について紹介しつつ、異文化から知識を取り入れる日本人のユニークな特徴を次のように示している。日本人は昔中国から文明を学び、近代時代に西洋から知識と科学を効率良く身につけられてきたのは、模倣の才能があるのみならず、新しいものに対する好奇心と未知の事を理解しようとする情熱、世界情勢への関心もあるからであると説明している。

2-2-2. 日本の近代化を通して西洋への服従を否定

近代化への着手が日本より早かったエジプトは、結果として挫折している。要因はいくつも考えられるが、その一つに模範の問題があった。カーメルは、この点に関して以下のように述べている。

近代化を目指す国々は、ヨーロッパを模範とする事に限らず、成功した日本をモデルにし、その成功の原因を追求すべし。我々東方人は西洋文明には追い付くことができず、ヨーロッパには対抗できないので西洋に従うしかないと伝えられてきた。しかし、我々東方諸国の中から日本がこの宿命を打破し、近代国家を実現したことは、文明に追いつくことができるという希望を東方の国々に与えた。エジプト人は、日本がなぜ短期に近代化を成し遂げ、西洋の列強諸国の一つであるロシアに勝利することができたのかという疑問を抱いている。本書では、日本の近代化の成功の背景を追及し紹介する。38

カーメルは、日本とエジプトが最新技術を用いた軍事力によって国家の領土を拡大したことを類似点として挙げている。エジプトは19世紀初期に近代国家を目指し、強力な陸軍と海軍をつくり周辺諸国を従わせた。一方、エジプトより半世紀遅れて近代国家を目指した日本は、戦争で勝利を収め中国とロシアでの領土を拡大している。ただし、その後の両国は状況が一変しており、その原因についてカーメルは政治体制の相違と地理的要因を指摘している。政治体制に関しては、19世紀初期以降西洋文明がエジプトに導入されたものの、政治体制は旧態依然の独裁政権のままだったため近代化が阻害されたと分析している。一方、「日本は偉大な支配者に恵まれている。この支配者は支配権力と主権が、国民を支配し抑圧するためにあるのではないと理解している。権力と主権の性質を正しく理解している。自らが国の繁栄と幸福の源になるべしと意識していた」と述べている³⁹。地理的な面においては、エジプトが戦略的な場所にあった事がイギリス侵略の要因であり、特にスエズ運河の開通によって戦略的重要度が増し、列強国による植民地抗争の火種になったと指摘している。そのため、カーメルにとって、エジプトの近代化の失敗の始まりはスエズ運河が開通した年(1869)であり、時をほぼ同じくした日本は(1868年)、明治維新を経て近代国家を築き始めたと考えている⁴⁰。

2-2-3. 日本の近代化のオリジナリティ

エジプトが近代国家を目指した際の問題の一つに、人材育成があった。当時は識字率が低く、人材を育成する教育機関は、宗教的機関、クッターブ(寺子屋)や地方の大きなモスク、そして最高峰の高等教育機関であるアズハル大学のみであった。そのため、新たに導入された西洋型の教育は、イスラームに根付いた教育を重んじてきたエジプト人に拒絶され、両者の間に衝突を生んだ。西洋化と近代化の葛藤が起こったのである。エジプトはヨーロッパを模倣すべきか、イスラームに基づくオリジナルモデルを創るべきかで多くの議論を呼んだ。こうした議論は現在に至るまで継続しているが、内外の情勢によって時代ごとに変化している。その中で、日本が1889年に大日本帝国憲法を發布し、それに基づく議会の成立、そしてその数年後には中国とロシアに勝利したことは、エジプト国内に大きな衝撃をもたらした。強い国家を実現するためには、西洋の模倣でなくとも、オリジナルモデルの実現が可能であるという考えが強まった。こうした課題に関するカーメルの見解を見てみよう。

昔中国から文明を学び、現在西洋から知識と科学を身につけられたのは、日本人に模倣の才能があるのみならず、新しいものに対する好奇心と未知の事を理解しようとする情熱、世界情勢への関心もあるからである。41

以上のことから、カーメルは、日本は西洋を模倣したが、西洋を模倣すること自体はオリジナリティには矛盾しない。かえってその模倣をもとにしてオリジナルモデルをつくることができると実証しようとしている。

2-2-4. 日本とエジプトの近代化の比較: 経済と政治

カーメルは、明治憲法の發布と、財政特に外積に対し日本が採用した政策に大きな関心を示した。エジプト政府は近代化を推し進めるため、多額の負債を抱えていた。そのため、1875年に財政悪化に伴いスエズ運河株式会社の株を売却した結果、内政への外国干渉が始まり、最終的にイギリスに占領されることになった。一方、日本の為政者は外国からの干渉を避けるため、外積に頼らないよう尽力した。それについてカーメルは、「日本の外積はエジプトと比べたらはるかに少ない」と比較している⁴²。

カーメルは、日本では憲法が發布されたのに対し、エジプトでは憲法が設立されるような予兆すらないと考えていた。なぜなら、エジプト人は法律を守ることになれておらず、まずは秩序に慣れるような訓練が必要だったからである。一方、日本人は法律と規律に馴染んでいた国民なので、1889年に發布された民定憲法が受け入れられやすかったと考察している。その中で、「604年聖徳太子の十七条憲法」や「北条の御成敗式目」、「1742年公事方御定書」、「五箇条の御誓文」、「1889年の憲法」、「伊藤博文の『憲法議解』」などを指摘しつつ、日本では憲法が發布されるような下準備ができていたと解説している⁴³。そして、日本とエジプトの近代化を比較するロシア人ジャーナリストのエピソードを以下のように紹介している。

1875年から1877年の間にフランスに滞在していた時、日本人とエジプト人の留学生仲間がいた。私はエジプト人と時間を過ごすことが好きだった。彼らの住まいに遊びに行くと楽しい話しをし、カフェやクラブに連れて行ってくれた。一方、日本の留学生は、学問の新しい発見や、発明、新しく出版された著作について話さなければ、一切口を利いてはくれなかった。更に、図書館か学会、文学・政治的な講演会にしか同行してくれなかった。彼奴らは小人でつまらなくて好きじゃなかった。エジプトの方が好きだった。しかしながら、現在(1894年)両国の現状を見て、日本人とエジプト人の留学生の行動の原因を理解した。現在日本が東方の列強国である一方、エジプトはイギリスの植民地である。実際、エジプト人留学生は頭が良くて博識だった。だが、彼らは留学終了後に帰国しても自主独立や自立できず、自由もなく、いくらヨーロッパ人より学問と知識に尽力しても、教育現場や職場においてヨーロッパ人の方が優先されるという現実絶望していた。彼らは自由な意志をなくし、支配者の道具となり、自国のために何も尽くせず、支配者の権力を支えるために留学していると考えていた。一方日本人は、有色人が白人に勝てるような日本を作るために留学していると確信していた。それが、日本人の新しい知識と発見、発明への好奇心と探求心、精神の高揚となり、反してエジプト人の無頓著と精神の沈下の原因となったのではないか。44

カーメルは、エジプトに日本と同じように国を重んじる為政者や支配者がいれば、近代化は成功し植民地にならなかつたらうと主張している。次いで、政治や教育などについて日本の幾人かの偉大な人物、例えば伊藤博文や大隈重信(1838-1922)、板垣退助(1837-1919)、井上馨(1836-1915)、大久保利通(1830-1878)らを紹介しつつ、日本の近代化を多角的に解説している45。

結論

カーメルは、近代化に成功した日本をかなり高く評価しているが、部分的に批判した面や無頓着な面もあった。政治的な面においては次のように批判している。日本政治の欠点として、幕府を倒した後、薩摩藩と長州藩がほぼ日本国家の政治と軍事的な権力を握った。結局、これらの藩によって新たな幕府が置き換えられたようであり、旧政治が継続している印象があると批判している。また、日本では形式的にヨーロッパと同じく議会制度が採用されたが、実際には議会は力不足で、質疑応答は大臣でなく官僚が代わって回答していた。さらに、「日本の選挙制度と選挙結果は、人々の意志より資金の力で定まることが多い。資金の影響力で選挙の方針が定まるという悪習は、おそらくヨーロッパから日本の選挙制度に入ったと思う。日本の議会では、ヨーロッパと異なり、殴り合いに至るまでの議論は行われぬ。」と述べている。社会的な面においては、次のように批判している。「20世紀後半になると、日本は西洋をモデルにして近代国家を築いたが、社会構造はまだ伝統的で封建時代からの慣習が残っている。封建時代は日本人が武家、農民、職人と商人という四つの階級に分けられていたが、現在では皇族、華族と平民という

三つの大きな階級に分けられている」と述べている。このようにカーメルは、専制政治と階級社会を批判しつつ日本の近代化を評価している⁴⁶。一方、彼は日本の植民地政策に関しては無関心であった。上述したように、日露戦争でロシアに勝った日本を賞賛したが、中国と朝鮮半島に対する日本の植民地政策については殆ど触れていない。

カーメルは、エジプトを巡るイギリスとフランスの植民地抗争を厳しく批判し、イギリスの侵略と植民地政策を非人道的な行為と形容し非難していた。それにも関わらず、日本とイギリスとの同盟関係や、朝鮮を巡る植民地抗争などに関しては無頓着だったと言っても過言ではない。また、エジプトに対するイギリスの植民地政策と同じように、朝鮮を植民地化しようとする日本には異を唱えていないことは注目すべき点である。特に、イギリスの植民地政策と同等の理由づけ、例えば朝鮮(エジプト)の「自立・近代化」、「財政の修正」、「内政の秩序の設立」、「他国による強奪からの保護」といった表現を日本も示していたのだが、カーメルは一切咎めていないのである。カーメルはイギリスによる植民地支配以前の1882年、イギリスの政治家によるエジプト訪問が内政干渉に当たると述べ、エジプトを植民地化するための準備だと抗議した。しかしその一方で、伊藤博文が1898年に朝鮮を訪問したことは、ロシアの悪意から朝鮮を守り、朝鮮が近代化を成し遂げるように支えるためであると擁護している。さらに、朝鮮を巡る日清戦争と日露戦争を「正義と権利の戦い」と名付けているのに対して、エジプトを巡るイギリスとフランスの植民地抗争と、エジプトがイギリスに侵入されたことに関しては「略奪と強奪」と形容した。

こうしたカーメルの考えは、エジプトの流行と世論に通じる態度であったと言えよう。当時のエジプト人は、日本の植民地政策や多神教である事には焦点を当てていなかった。換言すれば、イギリスからの独立を目指していたエジプト人は、日本が起こす害は見ても見ぬふりをして、非西洋諸国の富国と強国の模範と見做した。カーメルは、日露戦争に対するエジプト人の感情を、「我らエジプト人は日本人が勝利するように願っている。」と述べている。その理由として、「イスラーム教徒にとって、オスマンカリフの敵であるロシアが負けるように願うことは義務である。」、「日本は非ヨーロッパ国であるので、ヨーロッパ国に勝利すると、我らエジプトは非ヨーロッパ国として希望が与えられる」と説明している。また、「日本の方がロシアより正義と自由な国である。」とも述べている。なぜなら、「ロシアはヨーロッパからアジアまで及ぶ広大な大国にもかかわらず、日本が日清戦争で獲得した領土と権利を奪ったことは正義ではない。」からである。さらに、「良心のある人間ならば、トルストイという偉人を抑圧したロシアを支持することはない。」、「自由がないロシアより正義のある日本が勝つように支持するのは当然である。」と論じている⁴⁷。

上記をまとめると、近代時代に至るまでエジプト人の持つ日本のイメージはファンタジーのようであった。しかし、19世紀後半になると、その関心は具体的になり身近な存在となっていく。知識人においては1889年に発布された明治憲法と、日露戦争(1904-1905)で列強であるロシアに勝利したことが関心の中心であった。それにより、多くのエジプト人は日本を友好的に捉え、人種や宗教が異なるものの東方国の一員(仲間)と位置付ける事で、エジプトもイギリスに勝利する事が出来るかもしれないという希望を抱いたのである。

注

1. Mustapha Kamel, *al-Shams al-Mushreqa.* al-Liwa(First Edition), 1904
2. 内藤智秀、「日露戦争とパン・イスラミズム」『国際政治』(36)、pp. 85-102、1968年
3. 上掲書 p.86
4. 上掲書 p. 89
5. 上掲書 p. 90
6. 上掲書 p. 90
7. R・ハムザ,「イサム明治時代における日本のエジプト研究」『待兼山論叢. 日本学篇』16、pp.17-31、1982年
8. 上掲書 p.17
9. 上掲書 p. 30
10. 宮治一雄、「日本のマダガスカル研究」『日本中東学会年報』3 (1), 247-274, 1988年
11. 上掲書 p. 247
12. 上掲書 p. 248
13. 渡辺宏、「日本のイスラーム研究史紹介—明治末年まで—」『オリエント』5 (3-4), 31-62, 1962年、pp.36-7
14. 上掲書 p. 33
15. Ibn Khordadbeh, *Kitab Al-Masalik Wa'l-Mamalik*, 1306 (Lugduni-Batavorum. Apud E. Brill 1889) pp.69-70.
16. 宝利尚一他、「日本とイスラーム世界の出会い—明治, 大正, 昭和時代のメディアを通して—」『北海学園大学人文論集』(39) pp.15-153, 2008、p.22
17. 渡辺宏、「日本のイスラーム研究史紹介—明治末年まで—」、p.49
18. 上掲書 p.49
19. Daly Charles, *Annual address: the early history of cartography, or what we know of maps and map-making before the time of Mercator*, Journal of the American Geographical Society of New York 1879, p.23
20. Ibid p.24
21. (*Nuzhat al-Mushtaq Fi IKhtiraq al-Afaq*, Maktabat al-Thaqafa al-Dinyya 2002) を参照
22. Ibn Khaldun, *The Muqaddimah: An Introduction to History*, 3 vols. trans. Franz Rosenthal, Bollingen 1958, p.103
23. The Waq Waq tree from a manuscript of *Kitab al-Bulhan*, mostly 14th century. Bodleian Library, University of Oxford, MS. Bodl. Or. 133, fol. 41v.(Stefano Carboni, *The 'Book of Surprises' (Kitab al-Bulhan) of the Bodleian Library*, THE LA TROBE JOURNAL(92), State Library of Victoria, pp. 22-34, p.33)
24. *al-'Amal al-Kamelah Lil-Hafiz Ibrahim*, Hindawi 2012, p.174 (Ghada al-Yappan(『日本の乙女』は1904年に初めて出版された)

25. Ahmed Fadaly, *al-Naffs al-Yappanyya*, al-Waeth(First Edition), 1909
26. Ibid p.1
27. 「日露戦争と日土関係—20世紀における日露戦争の記憶—」、p.175
28. Amr Shalakany, '*I Heard it All Before*': *Egyptian tales of law and development*, Third World Quarterly Vol. 27, No. 5, pp 833–853, 2006, Ziad Fahmy, *Francophone Egyptian Nationalists, Anti-British Discourse, and European Public Opinion, 1885-1919: The Case of Mustapha Kamil and Ya'qub Sannu'*
<https://www.britannica.com/biography/Mustapha-Kamil>
29. 『東方の太陽』p.5
30. Ibid p.7
31. Ibid pp.54
32. Ibid p.56
33. Ibid p.56
34. Ibid p.57
35. Ibid pp.62-3
36. Ibid pp.63-4
37. Ibid pp.65-6
38. Ibid p.8
39. Ibid pp.9-11
40. Ibid p.10
41. Ibid pp.65-6
42. Ibid p.173
43. Ibid pp.154-5
44. Ibid pp.14-15
45. Ibid p.94
46. Ibid pp.137-49
47. Ibid pp.18-21

日本語の参考文献

1. 加藤博、『ムハンマド・アリー—近代エジプトを築いた開明的君主 (世界史リブレット人)』、山川出版社、2013年
2. 古林元、「日本と回教園の文化交流史—明治以前における日本人の回教及び回教園知識—」、『中東調査会』、1975年
3. ハムザ・イサム、「明治時代における日本のエジプト研究」、『待兼山論叢. 日本学篇』(16) pp.17-31、1982年
4. 本牧公夫、『条約改正は近代の日本的システムにいかなる影響を与えたのか—不平等条約をめぐる日本の外交と明治立憲制の成立』、22世紀アート、2021年
5. 長沢栄治、『近代エジプト家族の社会史』、東京大学出版会、2019年

6. 杉田英明「日本人の中東発見—逆遠近法の中の比較文化史」中東イスラーム世界2東京大学出版会、1995年
7. 津田左右吉、『明治維新の研究』、毎日ワンス、2021年
8. 臼杵陽、『「中東」の世界史』、作品社、2018年

英語の参考文献

1. Adal Raja, *Beauty in the Age of Empire : Japan, Egypt, and the Global History of Aesthetic Education*. Columbia University Press, 2019.
2. Brugman J., *An Introduction to the History of Modern Arabic Literature in Egypt*, Leiden, 1984.
3. Ellis Matthew, *Desert Borderland: The Making of Modern Egypt and Libya*, Stanford University Press 2018.
4. Khaled Fahmy, *All the Pasha's Men: Mehmed Ali, his Army and the Making of Modern Egypt*, Cambridge University Press 1998.
5. Fujiwara Gideon, *From Country to Nation: Ethnographic Studies, Kokugaku, and Spirits in Nineteenth-Century Japan*, Cornell Univ East Asia Program, 2021.
6. Goldschmidt Arthur, *Modern Egypt: The Formation of a Nation State*, Routledge 2004.
7. Harding Christopher, *A History of Modern Japan: In Search of a Nation: 1850 to the Present*, Tuttle Publishing 2020.
8. River Charles, *The History of Modern Egypt: From Napoleon to Now*, Createspace Independent Publishing Platform 2013.
9. Shively Donald, *Tradition and Modernization in Japanese Culture (Studies in the Modernization of Japan)*, Princeton Univ Pr., 2016.
10. Tagore Rabindranath, *The Spirit of Japan*, Mint Editions, 2021.
11. Timothy Amos, *Revisiting Japan's Restoration (Routledge Studies in the Modern History of Asia)* Routledge, 2021.
12. Woodacre Elena, *The Routledge History of Monarchy*, Routledge 2021.